天遊 TenYou

大阪教育大学広報誌

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

Summer 2018 Vol.45

授業探訪

新任役員紹介
森田 英嗣 理事

ラボ訪問

STUDENTS NOW!

卒業生CATCH!

BAGの中身

附属学校園ウォッチ

ゼミ室こぼれ話

TOPICS

特集 大教から世界へ 海外留学

大教大NAVI

アプリを利用すれば、今号の「天遊」に関連した動画が視聴できます。

「大教大NAVI」アプリをダウンロードして、左記のアイコンと同じボタンをアプリ内でタップするとカメラ画面に切り替わります。次に左記のアイコンをカメラに読み込ませると、動画が視聴できます。
詳しいアプリの使い方はホームページをご参照ください。

国立大学法人
大阪教育大学

大教から世界へ 海外留学

本学ではさまざまな留学プログラムを用意し、
世界に挑戦する学生をサポートしています。

大学生活を充実させる留学までの道のりを紹介します。

START

まずはWEB※で海外留学ガイドをチェック!!

教養学科
欧米言語文化専攻 4回生
河野（かわの） 光希（みつき）さん

STEP.1 留学に興味はあるけれど…

勉強、バイト、部活・サークルなど大学生活はやりたいことがたくさんある。そんな中で留学ってどうなんだろう？と思ったら、まずは情報収集から！グローバルセンターの留学説明会やパンフレットを活用して、大教の留学制度を調べます。

STEP.2 留学に向けプランをねる

何を、どこで、どのくらいの期間学ぶのか。留学の目的や動機と照らし合わせて、よく考えましょう。授業の履修、教育実習、就職活動など大学生活を総合的に考えることが大事！お金のことなど、家族とよく相談し、奨学金制度についても調べてみましょう。

STEP.3 長期休みに語学文化研修にトライ！

教育大ならでは！海外の小中学校に訪問するプログラムもあります。

夏休みや春休みに参加できる語学文化研修。行き先や費用もさまざま。1～5週間程度の短期間のプログラムなので気軽に参加できます。

STEP.4 やる気に火がついた！もっと長く留学したい

海外協定校に半年～1年間留学できる交換留学制度。成績や語学能力など必要な応募資格を確認し、選考試験に向けてしっかりと準備しましょう。

留学可能な海外協定大学は、13か国・地域に30校

STEP.5 外国語学習支援ルームで、語学の勉強法を相談

試験に向けて、勉強あるのみ！

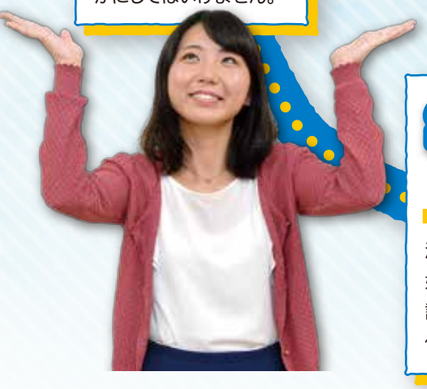
語学力向上に努め、語学検定試験などを早めに受験しましょう。外国語学習支援ルームを活用したり、留学生と交流したりするのも良いでしょう。

STEP.6 いよいよ、選考試験

選考試験には、書類審査、面接などがあります。派遣先の国や大学によって選考時期が異なるので注意。

STEP.7 合格

選考試験に合格！だからといって、勉強をおろそかにしてはいけません。



STEP.8 出発準備

派遣先大学への申請手続きが始まります。他にもビザの申請、航空券の手配や海外旅行保険への加入などが必要です。

STEP.9 いざ、留学！

安全、健康に気をつけて、楽しい留学生活を送りましょう。大学と常に連絡を取れるようにしましょう。

STEP.10 帰国

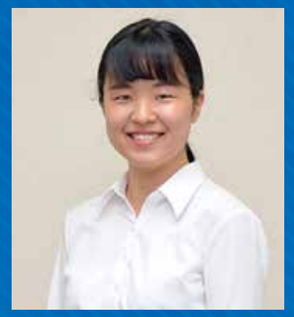
留学先での経験を、その後の学生生活や進路・就職にどのように活かすか、留学の成果を振り返り、客観的に見つめ、次のステップへつなげましょう。

GOAL 卒業

留学経験者は、英語教員になったり、海外に展開している企業に就職したりしています。また海外の大学院へ進学する人もいます。

※グローバルセンターWEBサイト https://osaka-kyoiku.ac.jp/ic/

〈留学体験談〉



学校教育教員養成課程
英語教育専攻 4回生
玉置（たまき） 萌（もえ）さん

新入生オリエンテーションで配布された「海外留学ガイドブック」を見て、大教の留学制度を知りました。そこからアメリカ語学研修に興味をもち、夏休みに参加しました。アメリカでは、英語教育専攻なのに、上手く英語でコミュニケーションを取ることが出来ず、ショックを受けました。その体験で火がついて、交換留学制度を使ってアメリカに戻ろうと決意し、必死に勉強するようになりました。学内の選考に合格し、奨学金までもらえることになった時は、本当に嬉しかったです。交換留学中は、主に教育学の授業を現地の学生に混ざって受けていました。特に苦労したのはディスカッションの授業。テンポの速い会話のキャッチボールになかなかついていけませんでした。留学の一番の成果は、離れたくないと本気で悲しくなるような友達を作れたこと。留学に行って卒業は1年遅れましたが、教育実習もきちんとこなし、これから始まる教員採用試験の準備もしっかりできているので、何も問題は感じていません。ただ、早い段階から、実習や就活のスケジュールを踏まえて、留学のタイミングを決めることが大事だと思います。留学を迷っている人には、まずは一歩踏み出してみてと言いたい。少しでも海外や留学に興味がある方は、私も学生スタッフをしている外国語学習支援ルームにぜひ相談に来てほしいです。

授業探訪

大教生はどんな授業を
受けているのか？
講義室をのぞいてみました。

Explore the Class

教育科学入門

学校教育講座　白井（しらい） 利明（としあき）教授

「私の本当の姿をお見せします」。学校教育講座・白井利明教授が、学生に話しかけます。片目をふさぎ、もう一方の目に5円玉をあてて、その穴から白井教授を覗き見ます。すると、教室の両端に座る学生から「先生が小さく見える」と声があがります。同じものを見ていても、対象との距離が変わると、見える大きさも変化します。私たちには、遠いものほど小さく見えるという知識があるため、心が自動的に補正しているのです。これは「知覚の恒常性」という心理学の現象と関係します。続いて、マッハの錯視という、奥行が反転して見える錯覚の実験が行われます。紙をW字に折って机に置き、片目をふさいで、凝視します。すると、あちこちから「紙が立ち上がって見える！」と驚きの声があがりました。この日の授業では、一見教育とは関係なさそうな、錯覚、錯視を体感する実験が次々と行われました。

「私たちに見えていることは、実際と同じではありません。人は、目から取り込んだ情報を、頭の中にある情報や知識と統合し、再構築して認識します。私たちはそうやって、言わば『心の目』で、物事の表面だけでなく、本質を捉えようとしているのです」。白井教授はそう説明したあと、「では、このことが子どもと教育を考えるうえでどう役立つと思いますか」と問いかけます。学生たちは、「実験で自分の主観が簡単に揺らぐことがわかった。たとえば子どもの表情を主観だけで判断していたら、本当の気持ちに気づいてあげられないこともあるかもしれない」などと次々に意見を発表しました。白井教授は、「教師と子どもが同じものを見ても、違って見えていることがある。教師は、子ども目線で考える必要があります。逆に同じものが同じように見えるということは、教師も子どもも、心の目で見た結果同じものが見えているということ。その素晴らしさ、複雑さにも感動してもらえると嬉しい」と授業を締めくくりました。

白井教授は、「視覚や聴覚などの知覚はすべて自分中心。教師はそこから脱して、子どもの目にどう映っているのかという観点から、指導方法や教育内容を捉え直す必要がある」と説きます。「今回の授業では、視点を転換するということを体験的に学んでもらいました。今後は、教育内容を捉え直すとはどういうことなのかを考えていきます。学生たちはこれから、教師になるためにさまざまなことを学びますが、その前にまず、子どもの視点で物事を見直せるようになってもらいたい」

この授業には、さらに隠れた狙いがあります。それは、主体的に学ぶ姿勢を養うこと。大学生になって間もない1回生前期の授業だからこそ、自分から考える力をつけてほしいと白井教授は言います。「たとえば今回の授業では、錯覚の話をしただけですが、学生たちはそこから子どもと教育に関する学びを得ました。一見関係のない情報でも、問題意識を持っていれば、学ぶものがある。教師として教える立場になる前に、自ら学ぶ人になってほしい」と望みます。

【授業DATA】

対象学年：1回生
主な対象学生：学校教育教員養成課程
小中教育専攻学校教育コース
開講期：2018年度前期　木曜3限
備考：学校教育講座　金光靖樹教授、
小林将太准教授とのオムニバス授業

中等家庭科教育法Ⅰ

家政教育講座　鈴木（すずき） 真由子（まゆこ）教授

「配布したプロフィールシートをもとに、お薦めのアパートとアルバイトを提案してください」。家政教育講座・鈴木真由子教授が投げかけます。4人の学生がそれぞれ作成したプロフィールシートには、普段のスケジュールや自炊頻度、希望の間取りや職種などが書かれています。4つのグループに分かれた学生たちは、持参したフリーペーパーやスマートフォンを使い、生活スタイルや希望の条件と見比べながら探していきます。「2階より上の方が安全」「サークルで忙しいから、週1回くらいで働ける所ないかな」。出てきた意見をまとめ、お薦めの物件とアルバイト、選んだ理由をグループ毎に発表しました。

発表を聞き終えた鈴木教授は、「住まい方を考える時、収入と支出の総額を想定し、限られたお金を何にどう配分するかという発想が大事です」と指摘。さらに、「陽当たりや周辺の環境など、フリーペーパーやインターネットではわからない情報もあります。自分にとって必要な情報は何で、どうすればそれを得られるのか、しっかり考えることができる消費者にならないといけません」と強調しました。

このように、現実に即した想定で、知識やスキルを総合的に応用しながら実技や実演を行うことをパフォーマンス課題と呼びます。「今後は知識を暗記することよりも、それをどう活用するかがより重要になります」と鈴木教授。授業作りでは、いかに子どもたちの日常生活とリンクしたパフォーマンス課題を設定できるかが鍵になります。「今回のような消費生活の話は、個人の好みや生活環境に大きく左右され、絶対的な基準や正解はありません。だからこそ、リアリティのある内容にしないと、生徒の暮らしと、学校での学びがかい離してしまいます」

この授業は、Ⅳまである中等家庭科教育法の最初にあたり、授業の前半では、学習指導要領などの話を通じて家庭科という教科観を共有しつつ、今家庭科に何が求められているのかを確認します。後半では、実際にパフォーマンス課題を体験した後、教師としてどのように授業を展開するか、子どもに何を身に付けさせたいのか考えてもらい、授業デザインができるようになることをめざします。「残念ながら、豊かな家庭科の授業を経験してきた学生は多くありません。家庭科の魅力を、まずは体感してほしい」

授業で苦労することは二つあります。「一つは、生活体験が学生によって多様なので、それをどう授業に落とし込むかということ。もう一つは、“料理・裁縫”という旧態依然とした家庭科観を払拭すること。その仕掛けが難しく、授業を作るという感覚をなかなか共有できません」。衣食住、家族・保育、消費・環境など、生活に密着した教科だからこそ、日常のすべての経験が教材になります。「いろんな経験をして暮らしを楽しんでいる人が、魅力的な家庭科の授業ができる先生です」。学生にも、美味しいものを食べたり、おしゃれをしたり、まずは生きることを楽しんでほしいと望みます。

【授業DATA】

対象学年：2回生
主な対象学生：学校教育教員養成課程
小中教育専攻及び中等教育専攻家政教育コース
開講期：2018年度前期　金曜2限
備考：教育協働学科健康安全科学専攻の学生も受講可

新任役員紹介

森田英嗣（もりたえいじ）理事に聞く!

【略歴】
2012年4月～2014年3月　夜間学部副主事
2015年4月～2018年3月　大学院連合教職実践研究科主任
2018年4月～　国立大学法人大阪教育大学理事・副学長（研究・国際・附属学校担当）

「世の中は動くものじゃない、動かすもの。その原動力になるのが、『不適応』の力」と森田英嗣理事・副学長は語ります。

もやもやと説明できない違和感を抱えていた高校生活。転機は、アメリカ留学から帰国した同級生との出会いでした。「彼はいつも『それはどんな意味があるの?』と聞く子でした。それに感化されて、なぜ勉強や受験が必要なのかとか、物事の意味を考えるようになってしまった」。悩んでも答えを見つけられず、いい成績を取って、受験して、いい大学に行くのが当然という校風に適応できなくなり、一時不登校にもなりました。

大学には進学せず、卒業後は千葉の実家を離れ、東京で住み込みの新聞配達員として働きました。「朝早くから新聞を配って、一度寝て、また夕刊を配って、夜な夜な大人たちと遊びに行くような毎日でした。楽しくはありましたが、自堕落な生活に、自身の将来が見通せず、不安になることもありました」。そんな時、大学生活を楽しむ友人と再会し、この生活を続けていてはだめだと一念発起。茨城大学教育学部に入学します。「高校では、いい学校に行くために勉強させられていた。学ぶ目的がすり替っているし、生徒の学ぶ姿勢も内発的でない。そこに問題があるんじゃないかと思って、教育について考えてみようと思いました」。その後、千葉大学大学院教育学研究科修士課程、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程を経て本学に就職します。

就職して、1年ほど経ったある時、東京駅で長尾彰夫前学長に偶然出会いました。「福島へ向かう新幹線の中で、『国民がなんのために君に給料を払うかわかっているか。趣味みたいな研究でなく、役に立つことをやりなさい』と諭されました」。大阪大学大学院の先輩である長尾先生の言葉は、大学時代の教えを改めて思い起こさせました。「最初はわかっていたはずなのに、業績を作ることに一生懸命になっているうちに目的が見えなくなっていた。だから喝を入れられたんですかね」。以降、その言葉は頭から離れないと言います。

今取り組んでいる研究テーマの一つは「メディア教育」。映像や音声などを使って伝達される情報をどう認識し理解するかを、日本の学校教育の中に組み込むというものです。「例えば、ナチスが映画やラジオで民衆を引き付けることができたのは、映像や音声を使った当時としては新しいメディアを、読み解く力が十分に育っていなかったことが一因と言われています。他人からのメッセージを思慮なく受容するのでなく、それが何のために作られて、なぜ自分に届いたのかを考える力を育成することが重要です」

今年度から附属学校、研究、国際を担当する理事・副学長に任命されました。「グローバル化が進み、学校現場にも外国籍の子どもが増えています。例えばこうした社会状況の変化に対応できるよう、附属学校は新しい教育モデルを率先して作り、大学は、附属学校と一体になってそのモデルをつくる実践的研究を行う。今まで別々の人が担当していたものを一人で担うので、それぞれを関連づけてやってみたい」と意気込みます。

学生には、社会を動かす力をつけて欲しいと望みます。「変わっていく世の中を後追いし、それに適応するために労力を使うのではなく、自ら適応できる世の中に変えてしまえばいい。その力を大学で身につけて欲しい」

忙しい毎日の息抜きは、部屋に置いた水槽のメダカとエビを眺めること。「私の悩みとか生活とは別の論理で動く世界があると、見ていて安心。こちらが上手くいっていようがいまいが、それが何? と言われている気がします」。理事になってから増えた、スーツにネクタイの窮屈な日々の癒しです。

VISIT THE LAB　ラボ訪問

インタビュー動画が見られます。大教大NAVI 天

失敗を鏡に、自分を確かなものに

家には父親が描いた絵が飾られ、幼いころから画集に親しむなど、絵画は身近な存在だった芸術表現講座・寺島みどり准教授。「小学生の頃、自分では印象派風に描いた絵を先生に『雑』と評され、ショックを受けたことを強烈に覚えています」。絵を描くのは好きでしたが、美術の授業はあまり得意ではありませんでした。

美術大学に進むきっかけは父親の言葉でした。「ある日、父が『世の中には遊んでいてお金がもらえる職業がある。それは小説家だ』と言ったんです。真偽はともかく、企業で働くのとは違う、自分が作ったもので生活の糧を得る職業があるのだと気がつきました」。美術の勉強がしたいと考え、京都市立芸術大学に進学します。

大学では空間全体を作品として構築するインスタレーションを主に制作していました。「専攻は油画でしたが、コンセプトがしっかりしていれば自由に制作できました。成長途中だからということで好きにやらせてくれたのでしょう」。学内では制作に集中し、遊ぶ時は積極的に外の世界に飛び込みます。「素晴らしい先生方がいて、仲間がいて、物を作ることができて、何でも許される。そういう恵まれた環境を当たり前のように感じていました」と振り返ります。

そのまま同大学修士課程に進学し、修了後は非常勤講師として働きます。しかし、学部からずっと同じ場所にいることに疑問を感じ始め、制作発表を続けながら働こうと一般企業に入ります。

芸術表現講座
寺島みどり 准教授
TERASHIMA MIDORI

「なぜ周りの人は美術にお金を使わないのか、学生の頃から疑問でした。美大があるのに、その先の受け皿はない。なぜなのか。答えを知るにはまずは社会を知らなければと考えました」

10年ほど会社員を続けましたが、次第に制作と仕事の両立が難しくなっていきます。「美術の世界と同じく、会社にも一途に仕事に打ち込む人たちがいました。私も何か一つに打ち込まなければ」。迷った末に会社を退職。大学の非常勤講師をしながら制作を続け、2013年に本学准教授になります。

今めざしているのは、キャンパスの中だけでなくその外の空間にも影響を及ぼすような作品を生み出すこと。「例えば、有名な『モナ・リザ』は大きな部屋に飾られていますが、その部屋のどこにいても存在を感じるような、ただならぬ気配を放っています。そういう空間を作れるものがいい作品だと思っています」。風景をモチーフに制作を続けています。

学生たちに企業で働いていた時のことを聞かれると「もちろん上手くいかないことだらけだったよ」と話します。「挨拶もできない、社内のコミュニティに入ろうともしない。振り返ると、最低限のコミュニケーションの方法も知らなかった。それでは周りの人を不快にしますよね」。体調を崩すこともありましたが、その時に教わったことが今に活きていると言います。「失敗を鏡にして自分を省みることで、自己を確立することができる。みんな社会に出ることを怖がっていますが、外に出て学んで、その経験を自分のものにしてほしい。未来を切り開くには、それしかありません。その力はみんなが持っています」。まずは行動してほしいと望みます。

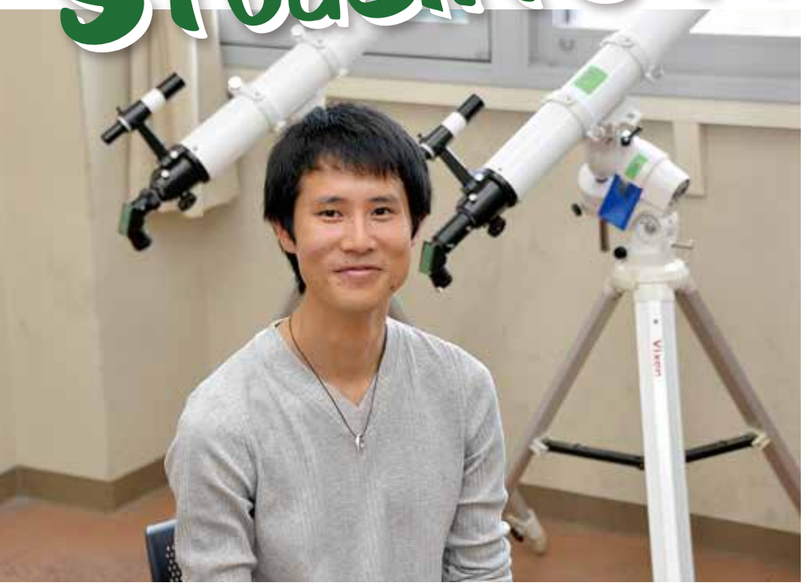
未来に大きな目標を立てるということはしないと話す寺島准教授。「その時できることを必死にやっていくと、今になる。過去のことも必然というか、もしあの時こうしていたらというIFの話はしないですね」。これからやって来る未来も、自身を形作ってきた過去も、ただまっすぐありのままに受け止める。そんな潔く凛々しい姿と、顔いっぱいに広がる快活な笑顔がとても魅力的です。

Students Now!

スチューデント ナウ

大教大NAVI 天

インタビュー動画が見られます。



本物を見たい、見せたい

大学院教育学研究科理科教育専攻 2回生　杉浦（すぎうら） 裕紀（ゆうき）さん（私立南山高等学校卒）

「気になるものが近くにあるなら、手をのばしてやってやろう。常にそういう気持ちでいます」と話すのは、大学院教育学研究科理科教育専攻の杉浦裕紀さん。

星好きなのは父親ゆずり。幼いころから家には望遠鏡がありました。「中学高校とも天文部。自由研究の課題として、家の望遠鏡で星の観測をしたこともあります。その頃から、どっぷり星につかっていましたね」。将来は、科学館のような社会教育施設で、子ども大人関係なく、いろんな人に理科や科学について教えたいと考えます。「そのためには幅広い理科の知識が必要なうえに、人にわかりやすく教える力も大事。それなら教育大学がいいと思い、天文学の研究室もあって、どちらもしっかり学べる大教大を選びました」。教養学科自然研究専攻に進学します。

入学後は学芸員の資格取得をめざしながら、広くいろんなことを勉強しようと考え、気象を学ぶ大気圏科学研究室に所属します。「例えば、天体観測の時にデータ収集がしやすい大気の状態がわかるなど、気象の知識は、天文学をやる上でも必要です。科学館で働く時に、気象学をやっていると有利と聞いたことも、この研究室を選んだ理由のひとつです」

天文学から離れていたわけではありません。2回生の終わり頃、理科教育講座の松本桂准教授のところへ、天文台での観測に参加させて欲しいと直談判に行きます。「最初は、もっとちゃんと勉強してから来なさいと断られました。それが悔しくて、大学院のゼミに混ぜてもらうなどして勉強の上、再度お願いして、参加を許されました」。天文学研究室のゼミ生にまじって、天文台に通うようになります。また、天文サークルにも参加。「小学校などに出張して、大きな青いドーム状のテントを張り、プラネタリウムをやります。星の解説をするのに、子どもたちや保護者の方にどう話せばうまく伝わるのか、とても勉強になります」。最近では、自身の卒業後も活動を継続してもらえるよう、これまでの経験や学んだことを後輩に引き継ぐことも大事にしています。

大学院への進学に迷いはありませんでした。「学部の頃から何度も通っていて、こんな環境のいい天文台はないと思っていました。これほどの望遠鏡を学生主体で動かせて、最前線の研究にかかわれるところはなかなかない」。天体観測のための昼夜逆転生活にもすっかり慣れ、辛くないと言います。「初夏だと陽が沈む18時くらいから準備を始めて、陽が昇る4時ごろまで。晴れていたらずっと起きて、研究しています」。星相手には、土日も関係ないと笑います。

昨年11月には、南極で観測や研究、基地設営を行う第59次日本南極地域観測隊に参加しました。「主に活動していたS17観測拠点では、お風呂はなく、トイレはペール缶、水は雪を溶かして作るしかない。見渡す限り真っ白の世界でした」。南極では、自動気象観測器を設置し、雪面の観測などを行いました。「一番印象に残っているのは、みんなが寝静まった後に一人で見た、極域でしか見られない月。この風景を独り占めしていると思ったら、たまらない気持ちでした」。いつかもう一度南極へ行き、今回学んだことを誰かに伝えたり、実践したりしたいと意気込みます。

「『本物を見たい、見せたい』という信念をもって勉強に力をいれてきました。その思いに応えてくれた人たちがいて、いろんな機会をもらったからこそ、今の自分がある。今後はもう少し時間をかけて、これまでの経験を上手に伝える方法や見せ方を勉強したい」。笑顔をたたえながら、終始和やかに話す杉浦さん。星や南極の話になった途端、少年のように目が輝きます。夢に向かって進むことを心から楽しんでいるのが伝わってくるようです。

卒業生 CATCH!

そつぎょうせいキャッチ！

大阪教育大学を卒業して
社会で活躍するOB・OGに
近況や学生時代のアレコレを
インタビューしてきました。

「お金を払ってでも、今の仕事をやりたい。それぐらい楽しい。そういう仕事に出会えたのは大教大のおかげ」と語るのは、堺市職員・言語聴覚士の花家薫さん。

フィールドワークが多かったのが、所属した保健行動学ゼミの特徴でした。「一人で入浴するのが難しい方の介助などを担っていた保健師の方に同行し、手伝いながらアンケートをとって研究していました」。指導教員だった故柳井勉先生は、もともと兵庫県庁で子どもの健康に関する仕事をしていた行政マン。「先生の生き方にすごく影響を受けて、行政機関で働きたいと思いました」

そんな時に実習先で、言語に障がいがあり、上手に話すことができない人と出会います。「相手の意図が汲み取れずにいると、突然『アホ』と言われたんです。なぜ話せないのにアホだけは言えるんだろうと不思議でした」。そこから言語のリハビリに興味を持ち、言語聴覚士という資格があると知りました。言語聴覚士とは、言語や聴覚の障がい、言葉の発達の遅れ、声や発音の障がい、嚥下障がいなどの原因を見つけ、対処法を探し、訓練や指導を行う専門職です。「一般の行政職だと、どこに配属されるかわからない。でもこの資格があれば、ピンポイントで健康分野にいけるかもと思いました」。大学卒業後、専門学校に2年通い、言語聴覚士の国家資格を取得。「専門学校では知識を叩き込まれましたが、それだけでは人間としての幅がでず、患者さんとうまく接することができない。大学で実習やボランティアを通してコミュニケーション力を培った上で知識を得たというのが良かった」。遠回りではなかったと振り返ります。

その後3年間の病院勤務を経て、堺市役所に行政リハビリ職として採用されます。最初はリハビリ教室の開催や、外出に付き添うボランティアの養成に取り組みました。10年程たった頃からは、患者を直接支援するよりも、条例の制定など行政職の色が強い仕事が増

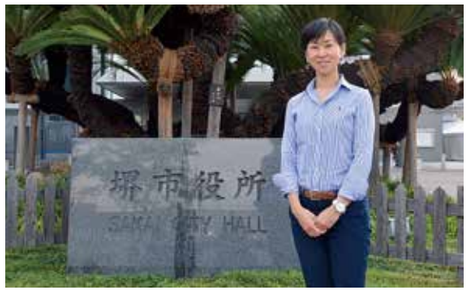
「人がより良く生きるために」

花家 薫さん

HANAIE KAORU

堺市職員・言語聴覚士

（1996年度 教養学科 スポーツ・健康科学・生活環境専攻
健康科学コース 卒業
2011年度 大学院教育学研究科 健康科学専攻
健康生活コース 修了）



えていきます。「もともと個別支援より、施策にかかわりたかった。制度を作ることで、85万人の市民がもっと生き生きと暮らせるようになる。人がより良く生きるとはどういうことか、毎日考えています」

政策作りに携わっていく中で、もっと専門職の視点をいかせる武器が欲しいと、本学大学院教育学研究科健康科学専攻で修士号を取得しました。「例えば事業を評価する時、参加者数とかではなくきちんと統計学を使って評価ができます、と言えるようになりたかった」。夜間大学院には、職種も経歴もさまざまな社会人が集まっていました。「相互に学び合う、とてもいい環境でした。大学院での交流が縁で、看護専門学校に教えに行ったこともあります」

現在取り組んでいるのは、介護サービスの充実や高齢者の生きがい作りなど、高齢者を地域全体で支える仕組み作り。病院や介護施設、NPOなど、地域のさまざまな機関が連携してサービスを提供していくことをめざしています。それに向け、条例文の作成や関係機関との調整に奔走する毎日です。

仕事と並行して、神戸大学大学院保健学研究科の博士課程に通っています。言語聴覚士としての専門的な仕事が減ったため、自身の専門に特化した研究をしようと進学しました。「食べ物を飲み込む力を喉の動きから測定するキットの研究をしています。実用化できれば、レントゲンを撮る必要がなくなり、被ばくなど患者さんの負担が減ります」。睡眠時間を削ってでも仕事と研究どちらもやりたい、どちらかだけでは物足りないと笑います。

「自分の目で見て、体験して、それを自分の言葉で話す。学生時代の学びが、今の私を形づくっています」。大教生にも外に出て実践から大いに学んでほしいと期待を寄せています。

OKU男子 彼の気になる

BAGの中身

夢や希望でいっぱいの大教大生のカバンの中を特別に見せてもらいました。

シンプル、カジュアルな服装が好き。
身だしなみには
気を遣っています。

本
趣味は読書。自己啓発、教育関係、経営、経済などを中心に幅広く読みます。

ノート
授業用、放課後支援アルバイト用、焼き肉店でのアルバイト用など色で使い分けています。それぞれで教わったことや反省点を書き留めています。

カバン
長く愛用していて、使いこんでいます。物持ちがいい方です。

TOEFL試験対策本
大学の交換留学制度を使って留学したいので、まずはTOEFL試験対策をしっかりやって、スコアをあげようと努力中。

笛
小学校での放課後支援のアルバイトは、臨機応変さが重要。子どもと一緒に遊んだり、見守ったり。喧嘩の仲裁なんかもします。

やりたいことが多すぎる！
杉浦 僚（すぎうら りょう）さん
学校教育教員養成課程
小中教育専攻
保健体育コース 2回生

まずは行動！

図書館の前で、颯爽と歩く背の高い男子学生を発見。彼の名前は、杉浦僚さん。カバンをのぞくと、小学校でのアルバイトで使っているという名札と笛が目に留まります。「教育現場を実際に体験したくて始めました。他にも、生活困窮世帯を支援するNPOで、中高生の学習支援もしています」。なかには大人に不信感を持つ子どももいるので、接する時は言葉を慎重に選ぶなど頭はフル回転だそう。「でも子どもたちに笑顔で『ありがとう』と言われると、疲れなんか吹き飛びますよ」と満面の笑顔を見せます。

最近、カンボジアの小学校を訪問しました。「子どもたちの目の輝きに圧倒されました。学びたいという意欲が強い」。その経験から、海外の教育制度を学びたいと、留学を考えるようになります。「日本や海外の子どもたちの可能性を伸ばすことができる人になりたい」と、英語の勉強に力をいれます。

「もっと学びたい、もっと刺激がほしい」。まずは行動という信念のもと、これからも新しいことに挑戦し続けます。

❶本 ❷ノート ❸フェイスシート ❹ミントタブレット ❺のど飴 ❻体育用シューズ ❼TOEFL試験対策本 ❽手帳 ❾フレグランススプレー ❿スマホ ⓫名札 ⓬イヤホン ⓭のり ⓮印鑑 ⓯ヘアワックス ⓰授業で使う小学校学習指導要領解説 ⓱筆記用具 ⓲財布 ⓳子どもの注意を引くのに使う笛 ⓴キーケース ㉑カバン

空き時間は図書館で勉強。

カンボジアの学校で授業。
「表情やジェスチャーだけでも気持ちが伝わって、感動！」

大教大NAVI 天

オフショット動画が見られます。

大阪教育大学
附属学校園ウォッチ
Affiliated School | Osaka Kyoiku University

安全への思い受け継ぐ
附属池田小「祈りと誓いの集い」および大学の事業を実施

平成13年6月8日、大阪教育大学附属池田小学校に刃物を持った男が侵入し、8人の児童の命が奪われ、13人の児童と2人の教員が負傷しました。事件から17年を迎えた6月8日、同小で追悼式典「祈りと誓いの集い」があり、児童、保護者、教職員ら約1300人が出席しました。午前10時12分、犠牲になった8人の名が刻まれた「祈りと誓いの塔」の鐘が児童代表の手で鳴らされ、出席者全員が黙とうを捧げて冥福を祈りました。

同小で唯一、事件当時から勤務する佐々木靖校長は、「事件の前に戻ることはできません。私たちができること、するべきことは、事件の教訓を胸に、前を向いて、学校安全の推進に向けて力を合わせることしかありません。日本中の学校とさらには世界中の学校と手をたずさえ、学校が安全で安心できる場所であるよう、これからも努力を続けます」と誓いました。続いて6年生代表の児童3人が、命はかけがえのない大切なものであるという先輩たちの思いを心に刻み、下級生に伝え、学校の外の世界へも発信していくと決意を述べました。

式典後は塔の前に献花台が設けられ、多くの児童や保護者らが花を供えました。献花した6年生の児童は、「事件を忘れてはならないし、今後も伝えていかなければいけないとあらためて感じた」と話しました。また、保護者らは「今の安全な学校は、多くの方々の大変な努力によって成り立っている。子どもたちがそうした方々の思いを受けとり、引き継いでいってくれることを願っている」「普段は子どもに対していろいろ気になることもあるけれど、この日が来ると初心に返って、ただいてくれるだけでありがたいという気持ちになれる」などと話しました。

ゼミ室こぼれ話 第6話
《 グローバル教育講座英語学研究室 》

松本マスミ先生の英語学ゼミは、国際色豊か。これまでもたくさんの留学生を受け入れている松本先生は、研究指導の時は厳しいですが、普段はとても優しいです。今日は、アメリカ人留学生のメーガンさん、トロイさんと先生の研究室に集まっておしゃべりしました。二人とも日本語がとても上手で、すっかり日本に馴染んでいるように見えます。でも、意見をはっきり主張する文化で育った二人は、時々そのせいで日本人と上手くいかないこともあるみたい。そうならないよう、日本人にあわせて、言葉を少し弱めて話すように工夫していると聞いて驚きました。私は8月からフィンランドに交換留学に行くことが決まっていて、異文化で暮らすことに今は不安がいっぱい。二人に不安な気持ちを打ち明けると、「大丈夫！できる、できる！」と励ましてくれました。異文化で上手く暮らすコツを聞くと、「先入観をもたないこと」とアドバイスをもらいました。勉強だけでなく、アルバイトをしたり、友達とカラオケに行ったり、充実した留学生活を送っている二人を見て、私もフィンランドで有意義な留学生活を過ごすぞ！と改めて思いました。

（河野光希さん　学部4回生）

〈キリトリ〉✂

天遊 vol.45 アンケート

●本号でよかった記事を下から選んでください。
（3つまで。その他は具体的にお書きください。）
【　　】【　　】【　　】
（その他　　）

①大教から世界へ　②授業探訪　③新任役員紹介
④ラボ訪問　⑤STUDENTS NOW!　⑥卒業生CATCH!
⑦BAGの中身　⑧附属学校園ウォッチ　⑨ゼミ室こぼれ話
⑩TOPICS

●取り上げてほしい記事がありましたらお書きください。
（　　）

●本誌をどこで手にされましたか。
（　　）

●本誌をお読みになってのご意見・ご感想などをお聞かせください。

●次号以降、毎号『天遊』の送付を希望される方は記載をお願いします。
（一度、送付希望ハガキをいただきました方は、再度お申し込みは不要です。）

どちらかに☑をしてください	□ 次号以降、毎号『天遊』を送付希望します。 □ 今後『天遊』の送付を停止します。
ご住所 〒	
お名前	
お電話番号	

※お預かりした個人情報は広報誌「天遊」の送付以外には使用いたしません。

〈キリトリ〉✂

01 初のオペラ公演「フィガロの結婚」に挑戦

本学初のオペラコンサートを、奈良県橿原文化会館で開催しました。モーツァルトが作曲したオペラの代表格「フィガロの結婚」全4幕をイタリア語で上演しました。

指揮・牧村邦彦さん、演出・中村敬一さん、舞台監督・青木一雄さんという日本を代表するスタッフを迎え、ソリストは奥村哲さん（フィガロ役）や宮村果歩さん（スザンナ役）など、国内外で活躍する本学卒業生を中心に揃えました。コーラスやオーケストラは、本学教育協働学科芸術表現専攻音楽表現コースおよび教養学科芸術専攻音楽コースの学生らが務め、演技に呼応して美しい音を響かせました。

観客からは「フィガロが伯爵の数々の罠から逃れる様子がコミカルに演じられていて楽しかった」「夫人の伯爵への愛が清らかな声に込められていて、フィナーレで伯爵の心のこもった告白を受け入れるシーンには感激した」「初のオペラ公演でよくぞここまで仕上げたと思う。演奏、演技だけでなく、衣装やセットも素晴らしかった」などの感想が聞かれました。

フィガロ役を務めた奥村さんは、「大教大オペラは在学中からの夢で、とても幸せな時間でした。継続するのは大変だと思いますが、オペラのある大教大がスタンダードになってほしい」と期待を寄せました。

02 「やまお」も観戦 セレッソ大阪応援デーを実施

本学学生、教職員、附属学校の児童生徒らがセレッソ大阪の試合を観戦、応援する「セレッソ大阪・大阪教育大学応援デー」を、ヤンマースタジアム長居（大阪市住吉区）で実施しました。同イベントは、セレッソ大阪とのフレンドシップ協定に基づき、セレッソ大阪が本学を招待したものです。

対戦相手にFC東京を迎え行われた試合は、両チームとも隙のない試合運びをみせ、前半は双方ゴールを奪えず終了しました。試合が動いたのは、後半29分。FC東京の連携ミスをついてセレッソ大阪が得点し、勝利しました。

本学公式キャラクター「やまお」もスタジアムに駆けつけ試合を観戦。試合前にはセレッソ大阪チームキャラクター「ロビー」「マダム・ロビーナ」とともにサポーターと触れ合い、大学をPRしました。またハーフタイムには、フィールドに登場。観客席からの声援を受けながら、スタジアムを盛り上げました。

試合を観戦した学生は、「選手たちの気迫あふれるプレーに圧倒された。大教大とセレッソ大阪とで、一緒に地元大阪を盛り上げようという良い取り組みだと思う。また応援に来たい」と語りました。

〈キリトリ〉

料金受取人払郵便

柏原局
承　認
511

差出有効期間
平成31年
4月30日まで

切手不要

郵便はがき

5 8 2 − 8 7 0 5

（受取人）
大阪府柏原市旭ヶ丘4−698−1
大阪教育大学広報室 行

〈キリトリ〉

※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

①本学学生	②本学卒業生	③本学保護者
④本学教職員	⑤附属学校生	⑥附属学校保護者
⑦附属学校卒業生	⑧附属学校教職員	⑨名誉教授
⑩教育委員会関係者	⑪他大学教職員	⑫他大学学生
⑬その他（　　）		

公式Twitter
@OsakaKyoikuUniv

公式facebookページ
https://www.facebook.com/OsakaKyoikuUniv

公式Instagramページ
@osakakyoikuuniv

各種イベント、ニュース等を配信しています。
是非フォローしてください。

公式アプリケーション
Android・iOS
スマートフォン対応アプリ

天遊の動画も見れる

大教大NAVI
大阪教育大学入試ナビゲーター

取材時のオフショットや、紙面では伝えきれないイキイキとした学生・熱意のこもった教授などのナマの声を動画で配信!
〈詳しい使い方はホームページをご参照ください〉

App Store・Google Playから検索。
Available on the iPhone App Store　ANDROID APP ON Google play　大教大

「天遊」とは

「天遊」とは荘子の言葉で、人間の心の中に自然に備わっている余裕を表しています。キャンパス統合移転の記念碑に銘文として刻まれており、揮毫は故水嶋昌（山耀）本学名誉教授によるものです。「天遊」の読みからとった「TenYou」は、「十人十色、その中のあなた」というメッセージを込めています。

本誌はユニバーサルデザインフォントを使用し、再生紙に印刷しています。
この印刷物は、16,000部を768,000円で、すなわち1部48円で作成しました。

[天遊 vol.45] 2018年7月発行 企画・編集・発行／国立大学法人大阪教育大学広報室 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 TEL.072-978-3344 FAX.072-978-3225 E-mail kouhou@bur.osaka-kyoiku.ac.jp